

1978/5/28

韓国行

飛田 雄一

5月15日から20日までの5日間、初めて韓国を訪れた。田崎ひー（都市産業宣伝）の支那局に参加した。あわせた。

ソウルの町は、5月18日の統一五箇年計画祭のパレードで最も賑やかれて「豪華やかに披露しよう」というふうなスローガンで、ソウル市内にかけた。ソウルにも「5月18日は韓国の日」という名前で、これが叫ばれていた。

ソウルに付いた5月15日は、うちやがて5回目の国防衛の日であった。金浦空港からソウルへ飛んだ、友通の車前にカービン銃をもつた車隊が二列の車だが、それは国防衛の日に対する歴史的なものだ。二日前にタクシーでこの道を走っている時、突然ソウルがなってすぐそばの車が道路のわきに出た。タクシーもバスもラジオボリュームと一緒に音、乗客も運転手も車からおりて近くの田畠に腰を下ろす。聞いてみると国防衛の日は韓国統独立記念日である。

これがからは戦車の轟うるうる音が中継される。私がいたいなか道では空軍がサイレンをたてて一日通り過ぎただけである。だが、その時ソウルの市内前で訓練にでしゃしたくて車と距離にに戦車が道のまん中を通りこしたといつことだ。訓練で車を出されたのは約20分間であった。

毎日15日はこのように訓練が全韓国的に行われる約20分間である。

16日の夜には、ソウルの東大門カトリック教会で開かれたカトリックとプロテスタント両教の信者のための祝典が行われた。この韓国では政治的宗教を離れてことぶだれらしさだ。禮拝とていつ形で集会が開かれるということが聞こえたが、その禮拝もあった。

16日から始まる接待に少し遅れで、おじい、おばあ、お母さんと一緒に来たり、お母さんの中に入ってきた。おじいおばあお母さんと一緒にいた。日本でイメージしていたこの種の接待は、入口でおひしにチャックがあり少人数がそれをじり抜けで参加するという悲惨なものであったが、東大門カトリック教会での接待はとてもいいものではなかった。

最初へ行く道には1回の大群衆が立つ。田舎へくるのではなく、

1978.5.28

(20) いくげ通信 第4号

の裏へと向かって立ったが、人々は三ヶ月を集中していた。礼拝はうとうとカトリックの池田神父が説教をしているところであった。池田神父の説教の内容を理解することはできなかつたが、聞きとれる單語よりうえると現在大きな問題となつてゐる第一精縛の女工さん達の話を中心とした労働問題について語りしているようであつた。池田神父の説教は40分ぐらいのものであつたと聽つたが、聴衆を圧倒する迫力があつた。

礼母は、説教、讃美歌、祈りと続いていたが、通路まで人といつぱいの礼拝堂は人々の怒氣でとてもむし暑かつた。私は8時ころまで参加していながら、午時半から宣誓書や決議文が読み上げられたりしたが、その度に、礼拝堂の中央に陣どつている若い女工さん達を中心にじつくりと大きな歓声が上つた。五百人ほどの聴衆は喜んで参加してゐる風であつた。讃美歌の他にも禁止とされた「おお自由」という鬱々金歌も歌われていた。

しこの方では当座のペースがかなり大っぴらに説教とかアピールと人々をメセシテするが、そのすぐ隣で若い女の人がバラまかれた宣誓文を熱心に読み、読み終ればそれと手紙にたててカバンの中に入れて帰つていくという光景であつた。また、「おお自由」は、大きなカバンに回収したくて下り梯とづみ終ると「おお自由」と老人がしてやの近くにいる10数人ほど

つと笑つて「おお自由」としゃべつて、また「おおけらかんとした韓國民族がおとせだめや」といふがこの礼拝は夜の十一時ごろまで続けられたといつがうぶせらへめた。

X

X

ンウルは町のものが活気にみなれており、人々が老い若きもいたゞけて生きている様に思えた。何度もびっくりするような場面に遭遇した。

バスに乗つた時、大きなカバンをもつて乗り込んできた25歳の男がそのままカバンを置かれりように座つてしゃべりだした。くつ下のセールスマントである。その声がだんだんと大きくなり、若い15~20歳ぐらのバス車掌がとぎにくるがままわざります大きな声でサンアルのくつ下をひつぱつたりしながら宣伝とある。約10分間演説した後、一箱う足入一千五百ウォン(約30円)のものと合つぱしから乗客の膝の上においていく。その箱に手をふれると買わなければならぬことになつてゐるのが乗客も心得たもので全く手もふれない。時間がたつと全部回収してまわるが、それでも一箱だけ売れたようである。そのセールスマントは、大きなカバンに回収したくて下り梯とづみ終るとすぐ次の壁前を出つた。

(未完)